The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「量」から「質」へ : 方法論の橋を渡る
Author(s)	吉川, 徹
Citation	ソシオロジ. 2001, 46(2), p. 105-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70064
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

DOING SOCIOLOGY

「量」から「質」へ

——方法論の橋を渡る——

吉川　徹

「社会調査の人」として

数年来、親しく付き合っている同じ分野のある方と雑談をしていたとき、次のようなことを言われた。知り合ってまだ間もない頃、彼は私に「それで、吉川くんの専門は何なの?」と尋ねたことがあるらしい。それに対して私が「線形多変量解析です!」と答えたことが今でも可笑しく思い出されるというのである。大学院生の頃は、確かに自分の「専門」は計量社会学だと思い込んでいた。データセットとしてコンピューターに入っているものなら、タイやインドの社会調査データであっても分析手続きは同じだ、といういささか乱暴な考えを抱いていたような記憶もある。

しかし現在、私はその質問をしたときの彼とほぼ同年代にさしかかっているが「専門は何なの?」と大学院生に尋ねたときに「エスノメソドロジー」、「線形多変量解析」、「数理モデル」などという言葉が真っ先に出てくるようだと、「あのなぁ、そういうことではないんだけどな」と切々と説くかもしれない（あのとき彼は、そんなおせっかいはしなかったが）。

この手の応答は、ただ研究の方法論を述べているだけであって、その人の研究主題を答えているわけではない。旅行の行き先を尋ねられた子どもが、「飛行機で行くんだ」と嬉しそうに答えているようなイノセントな光景である。

社会調査の業績があることが研究者としての就職に有利だ、というような話を頻繁に耳にするようになってきた。「調査もできる」ということが、実践的な社会学者としての力量を示すことになるのだろう。だが、私たちのように量的な社会調査法を「専門」としているというのは、研究方法論が自分の仕事だといっているわけで、例えば家族社会学、教育社会学、宗教社会学などのように個別領域を研究しているという説明とはわけがちがう。それゆえに、私のように「社会調査の人」とラベルを貼られた（自分で貼ったのだが）人間は、「それでご専門は?」という前述の質問とあらためて対峙することになる。誤解のないように付言しておくが、そういう意味の今の自分の専門領域は社会意識論である。

社会学の範囲内で見渡してみると、研究方法論が事実上の研究領域として扱われているケースは、社会調査のほかにはあまり多くはない。すぐに思いつくのはエスノメソドロジーくらいである。なるほど社会調査士制度の拡充という話はあ

っても、臨床社会学士とか、エスノグラファー資格検定、社会学説士（師？）という話は、現実的には出てきそうにはない。そう考えていくと、やはり社会学界において社会調査だけが少し特別な状況にあることがわかる。

ある調査プロジェクトの始まり

「社会調査の人」というラベルを貼って間もない頃、私は一つの調査を始めた。はじめに中学生と高校生一千人あまりを対象に、学校の教室で、ものの見方、社会に対する一般的な捉え方などについての質問紙調査を実施する。次に、その青少年の父親・母親にもほぼ同じ質問票を配って回収する、という設計であった。回答はそれぞれの親子ごとに一つのデータセットとして整理した。当時の私は、この特殊なデータ構造を利用して得意の線形多変量解析（共分散構造方程式モデル）に持ち込むことを目論んだ。

このデータは物理的には、三人の調査票がホッチキスで綴じられたものが数百冊、いくつかのダンボール箱に入った状態で、今でも手元に保存されている。もちろん電子情報としては、コンピューターに格納されているわけだが、私はこの調査票の山を引越しのたびに大切に持ち歩いてきた。他方、研究のうえではこの調査データからいくつかの分析をした。そこからは、読み応えはあるけれども読者数の少ない計量社会意識論の本が出来上がった。

この分析を終えて数年経って、予算的な都合が整ったので、このデータの一部に対して第二波のパネル調査を計画した。つまり、六年ほど経ったこの若者たちに、全く同じことを尋ねたら、回答はどうなるのか調べてみようというものである。ホッチキスで綴じられた調査票をダンボール箱から引っ張り出して見直して、これの厚みをもっと増していくと面白いデータになるのではないかと思い至ったのがきっかけである。とはいえ、始まりが学校のクラス単位のサンプリングであったため、六年経つとそれぞれの個人は全くバラバラになっている。それゆえに全サンプルに追跡調査をかけるのには概算でも数千万円という資金が必要であり、これは到底無理そうだった。だから、いずれ大規模な調査をする時のためのパイロット調査というつもりで、小さな追跡調査をすることにした。

対象を当時高校三年生であった一クラスに絞って、当時の在籍者名簿から実家にあたり、そこから当人の現住所を獲得して、郵送で調査票を送った。この第二波調査票には、従前の意識項目に加えて、その後の学歴・職歴を尋ねる項目を組み込んである。インフォーマントはこのとき二〇代の中盤にさしかかっていた。

結局、クラスの八割弱（三五名）からデータを収集できた。それから私は、がむしゃらに計量分析に取り組んだ。四ウェーブのパネル調査データというものを分析したことがなかった

ので、何が出るのか数字が楽しみだった。有効回答数三五サンプルというのは、量的調査の統計学上のさまざまな限界をはるかに下回っている。それでもデータさえあれば、サンプルが三五ではなく三五〇そろったときと同じ枠組みの分析手法を試せると考えた（実際は、これはそんなに簡単ではなかったが）。パイロット調査とはこうして利用するものだろうと思っていた。

計量的アプローチの限界

ところが、ここで調査者である私は不思議な体験をした。当初の六八〇件の家族データは、不謹慎きわまりない言い方だが、パソコン上ではネズミの実験データと同じような、ただの数字の羅列である。それを実社会のリアリティに係留していたのは、前述の調査票の山だが、これも他人が見れば紙の束である。ところが、三五人に絞ってじっくり見据えると、個々の対象者の「顔」や、その群像の置かれていた生活世界がにわかにたち現れてくる。

データ操作に付随して分析者自身の社会認識が転換していく経過について、G・エルダーからも全く同じようなことを聞いたことがある。『大恐慌の子どもたち』の補章に詳しいとおり、彼も一九三〇年代の先行既存データに、数十年の時を経て断続的に個別追跡研究をかけた経験をもつ人である。これは、それまで鳥瞰していた社会が、焦点を変えるとミクロな虫瞰図に見えてくるという言い方でもいいだろう。ミクロからマクロに導くように論じられる社会学的想像力の道筋を、逆からたどっていくようなこの経路は、「社会調査の人」が、何かのきっかけでデータをモノグラフ的に検討するようになっていく場合に特有の体験かもしれない。

ともかくこの手書きの調査票を見ていると、さらなる関心や疑問が生まれてくる。例えば、高校三年生の一〇月に尋ねた「将来つきたい職業」と、二四歳の時点での「現在のお仕事」「将来つきたい職業」の欄（ともに自由回答）の記述内容が全く変わってしまう事例（「テレビ局内の何か」から、現在「専業主婦」となり、将来は「行政書士」希望）もあれば、ほとんど変わらない事例（「学校の先生」→「小学校教員」→「現在の仕事を続けたい」）もある。どうしてそうなったのか？どちらのケースも不可思議である。手元の学歴・職歴の回答から構成した三五本の骨ばったライフコースを眺めてみるが、「この人はどうして今その仕事をしているのか？」、「彼は何を考えてこの大学に行ったのか？」という意思決定に関わる肝心のところは、多変量解析ではもちろん、調査票を穴があくほど眺めてもわからない。

このほかでは、同一配列で尋ねた意識項目群への回答が、あたかも遺伝子情報を見ているかのように、ほとんど変化なく六年後に再現されているいくつかの事例も発見した。まさか六年前の回答を記憶しているわけではないだろう。すると

やはりその間の足どり（六年間のライフコース）を突き止めたくなる。あるいは、この青年の両親・きょうだいは、今はどうしているのだろうか？などと知りたいことが湧き出してくる。

もともと社会意識論というソフトな実態を計量的に扱ってきた私としては、院生時代はともかく、社会学の職業人となってからは「量的な調査データでは硬直した事実しか得られない」というような批判を振り払い、日本の社会意識のマクロな実態を、ちゃんと血の通ったリアリティとして示す工夫をそれなりにしてきた。それでもここに至って、ミクロでダイナミックな社会関係を探る作業においては、質問紙調査では限界があることを思い知らされた。この局面では、量的データはやはり一瞬の「断面図」しか見せてはくれない。

デジタルな質的アプローチへ

しかし、翻って考えれば三五人というのは質的調査の可能な設計規模なので、個別にインタビューして情報を補足することができる。そういうわけで私の調査は質的方法を用いてさらに展開されていくことになった。

全国各地に散らばった対象者に、あらためて電子メールや携帯電話で連絡をとり、この六年間についてのさらに詳しい話を聞く約束を取り付け、会いに行く。インタビューの前夜は調査票をあらかじめ読んで、手持ちの骨ばった「断面図」を頭に叩き込む。現場では対象者に了解を得たうえでデジタル・ビデオ（六〇～八〇分）をまわして、一次資料を逃さず切り取ろうとする。それでも会話は横道にそれ、雑談や世間話になるが、あらためてビデオを観ると、それもまた興味深い情報をもっていることがわかる。

このように、知りたいことをあたらめて尋ねる作業を進めていくにつれて、対象者のリアルな顔が見え、大学受験、就職活動、異性関係や家族構成などの個別の事情がわかるようになってくる。このインタビュー調査が一段落すると、録画された会話記録を、今度はテキスト情報として入力していった。

これと並行して、対象校の同窓会にアクセスして周辺的な資料を集めて、パソコン上に整理した。最近の表計算ソフトは、質的な情報と量的な情報を全く「好き嫌い」せず整理・集計してくれる。この点では、少なくとも私たちよりも柔軟な構えをもっているようだ。

面接調査のシーンを切り取った鮮明な映像・音声空間は想像していた以上に多産だった。情報量が多いといってしまえば、まさにそのとおりなのだが、そこには量的調査データの数字の羅列にも、ホッチキスで留められたパネル調査の調査原票にも、会話のテキスト・データにもないような、執筆意欲を掻き立てる、切り取られたリアリティの空間がある。なお、コンピューターの技術革新を疑わない私は、質的データ

の整理法について、やがて量的データの汎用統計解析ソフトのデータベースに、デジタル映像とデジタル音声と会話テキスト・データがリンクするというような、多次元デジタル・データセットの時代が来るだろうと夢見ている。実現すれば、例えばクロス集計票のセルをクリックすると、そこに入っている対象者の映像と音声が飛び出すというような学術論文の形が可能になるかもしれない。今回のデジタル・データがどう役に立つのかは未知数であるが、何年か後になって思わぬ方法でまた分析することになるかもしれない。

質的データを作品にしてみる

出発点であった質問紙パネル調査データという骨組みは、このような経過で質的な一次資料を得たことで、豊かな内容のあるライフヒストリーに描きなおすことが可能になった。この肉付けの作業が質的研究における分析にあたるところである。

質的データの分析方法については、この調査にはまり込むまでは、あまり知識がなかった。今でも人に教えろと言われると、そこまでの自信はない。どうやら質的調査の技法は、量的な社会調査法のようにシステマティックに、というか杓子定規に教え、学びうるものではないようだ。それゆえにとにかく必要に応じた形で、つまりドロナワ式で勉強していったにすぎない。もっとも、よく考えてみると量的な社会調査法についても、教科書には出てこないだけで、分析のコツのようなものがある。それがわからなければ、どれだけ調査法や統計学の知識を詰め込んでも、学術論文を書くところまで至らない。データが語っている事実を、方法論を駆使し情報量を的確に整理して記述するという意味においては、両者には似ている面も多いと感じている。

さて、もともと縦書きで日本の社会意識論を論じてきた私は、この局面では、さまざまな質的記述法のスペクトルのうちで、最も素朴で自然主義的な記述の方法をとることに決めた。つまり質問紙調査を併用したモノグラフ法で、一二名の若者のショート・ライフヒストリーを、私の主観を交えて描いてみることにしたのである。さらに、音声だけではなく画像（映像からのキャプチャー）も、リアリティ表現の形式として使ってみることにした。そして、ついにはフィールドに一眼レフカメラをかついで撮影に出かけるところまで至ってしまった。

先ごろ、この一連の調査をまとめた「作品」が出来上がった（吉川　二〇〇一）。これはもちろん電子テキストではなく、縦書き四六判の書籍になっている。この著作全体をあらためて眺めると、計量分析は申しわけ程度に付いているだけである。しかも、それはもはや線形多変量解析ではない。三五サンプルというメゾレベルの群像を無理なく描く場合には、「質」は「量」を淘汰してしまう。冒頭で触れた彼は、この

本を読んで今度は方法よりはむしろ内容の方を高く評価してくれた。

おわりに

同僚の川端亮さんたちは、数年来、質的データのコンピュータ・コーディングということをやっておられる。インタビューの会話記録や新聞の紙面などの質的なデータを題材に用いて、テキスト・データのもつ単語の頻出度や語句間の関連性情報を計量的プログラムを用いて整理し、従来は恣意的に扱われてきた局面で、システマティックに解析手続きを行なうというのがその方法である。例えば、一人の人物の信仰史が、聞き取り調査に対するこうしたデータ解析を用いることによって、数学的な経路でライフヒストリーとして根拠づけられていく（川端　二〇〇一）。

私の調査研究が量的でデジタルなデータの世界から歩み出して、たいへん素朴で質的なライフヒストリー記述に至ったのとは対照的に、こちらの方は「質」の側から「量」の側へと歩みを進める研究例である。両者は、方法論の橋を渡るという意味では共通する志向をもつ試みといえるかもしれない。

「質」と「量」という古典的な二分法に必要以上にこだわる発想は、生産的なものにはなりえないという指摘がなされて、すでに久しい。私もそのことには同意しているのだが、実際に進んでいくと、この両者の間は必ずしも連続的なものではなく、「国境」には深い谷があって、危なげな橋が架かっている。

そこでは谷底に落ちないように、注意深く歩みを進めなければならない。月並みなことになるが、この局面では、彼岸と此岸のどちらでも通じる、自分の専門領域のキーワードを命綱として握りしめて行くことになる。そこでやはり、大切なのは研究方法論ではなく専門分野だということを思い知ることになる。

参考文献

G・H・エルダー　一九八六『大恐慌の子どもたち』（本田時雄ほか訳）明石書店。

川端　亮　二〇〇一「コンピュータ・コーディングによる宗教的ライフヒストリーの記述」『宗教と社会』第七号、一三三－一五四頁。

吉川　徹　二〇〇一『学歴社会のローカル・トラック――地方からの大学進学――』世界思想社。

（きっかわ　とおる・大阪大学大学院人間科学研究科助教授）